

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019. 4



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

をりをりに

小宮山玉江

さざん花のつましやかに開きそむ寒に耐へぬく力潜めて
 野鳥さへ啄むなくて熟れ落つる柿の実安けく土に返さむ
 日もすがら草引くわれの客人まらうどかしじみ蝶舞ふわが身を巡り
 憐性とはかくもしつこくわが内に住みつきたるか冬の炬燧に
 長い事心のすみに積む根雪少しあけしやわが年古りて
 新しき眼鏡をかけて見る鏡われの気づかぬわが老い映す
 瞬きのはさまを流るる星ひとつ眼閉づれば内に尾を引く
 わが身にも枯れゆくものの多きなかひとつ光は無事故無違反

昭和十年生まれ。
 羊グループ所属。
 歌集に「冬の林檎」「葡萄棚の下で」
 がある。

薄ら氷を割りて鳴ら泳ぐる時には深く潜るものありて

薄ら氷を踏みたる兄の足形に弟かさねる学校への道

星ひかる空に地上の雪もまた輝き奏でる光の艶

わが歩む後をつきくる猫「くる」よどの道ゆかうか路は三叉路

からからと風に枯葉の舞ふ烟に種なし巨峰の講習を受ける

脱胞とふ生理作用を経て芽ぐむ葡萄の幼芽に春は穏しく

やがて芽の出でて撓たわむに実りたる葡萄を描く内なる烟に

消費者のニーズに添いて種を抜く不本意なれどわれは生産者

もはや春目覚めたるかや葡萄の木切ればじんわり樹液のにじむ

赤子のごとふんはり綿毛に包まれて冬を越したる葡萄の幼芽

なぜなのが分からぬけれどいとしかり芽ぶく葡萄に齡かさねて

一本の葡萄と言へども係はりの長きにあれば分け身のひとつ

作品 A

船田清子

みどりの龍

・天

極北の空にみどりの龍うねり月を巻きつつさらには高みへ
満天の星をなめつゝねる龍卵か腹の紅まがまがし
オーロラの多発地帯とふイエロー・ナイフ雪原にも道ふみどりの龍は
極光のみとなる年は地球上要注意とぞ 天変地変
汝が詠みし平城宮址の廐揚げのイベントとなる新春の空
風も人も天地に溢れ正月の言祝をなす「ミテマスカ? いま」
平成の最後の春を親子して風の糸引く 永久なれ平和

福田庸子

貨車の音

・今

ととのへて春を迎へむ山里の土にし宿るいのちと共に
平らかに年は明けたり光届く山の家居に鶴の声
切り方に乱れまじれど老い母の意氣に臉は紅白に呀ゆ
ゆくりなく浅間山を見つけたり車窓の果ての佐野を恋ひゆく
田に向かふ道はいくつも踏み切りを交はせど彼方を荒草がおほふ
真夜に沁む冬の鉄路をゆく音に覚めて聞きし日々はるかなり
高崎線を北に進める真夜の貨車伯父とつながる音と聞きしも

藤田美智子

成人式

・新

ふるさと浪江の成人式には出ぬ理由をうまく言へぬと少し笑へり
ガラスバッジつけるを拒みし少女ありき配りし側にわれは立ちゆき
行き場なき汚染土をまた使ふといふ企て進む八年めの春
いつのまに造られたるや山中の焼却場より煙があがる
届託なく人を「笑顔にしたい」と言ふたやすく雲を消せることくに
目元あたり君によく似る幼子が祭壇の前をちよろちよろ動く
三十年前の十五の君の顔になる笑つてこちらを見てゐる遺影

藤森巳行

くつ下

・銀

洗濯を頼めば片方くつ下の無いこと多し不思議な我が妻
文句言へばストレス溜まると妻は言ふ私は黙つてただ耐へるのみ
何回か注意をしたが効果なし以来くつ下私が洗ふ
過ぎてゆく月日の速さに追ひつけず節分の豆三粒食む
「地中海」背負ふ責任その重さ久我編集長苦勞が多し
細腕に抱へる重さ「地中海」少しは分けて我らが背負ふ
毎月の編集作業に従事する仲間に感謝「地中海」届く

萩

葉子

如月

・銀

浜谷久子

名

・地

朝五時はまだまだ暗いエンジン音寒さゆらして遠ざかりゆく
「鬼は外」声ややおさえ豆をまく健康祈る心をのせて
たまたま縁より一人子産み育て知り得しことの数限りなし
プランターの小松葉の葉のしっかりと濃緑みせて如月の朝
風寒し今日は肉汁汁多くしてねと言い置き娘出勤する
十センチ切りたる鉛筆輪ゴムにて括りサック買うまでのお休み
古川は今では遠い森のなか陽ざしも人も昔のままに

白子れい

新春

・洛

浜本芙美

墨絵

・夢

東の空あかるきも未だ陽のいでざる道を初詣でにと
参詣の人いまだなる諸羽神社こころゆだねてふかき祈りを
ひさびさに一人ぼっちの正月と知りてか教え子お節持ちくるる
教え子の優しきこころこもるかにすしりと重しお節の料理
わが不得手料理と知りいる教え子とおもい出数々語らう新春
家いすれば声のかかれり教え子ら将また彼らの母さまらより
われの日々教え子たちに見守られ励まされおり感謝感謝よ

ぱぱりょうこ

みきからひだり

・鹿

檜垣美保子

雪

・昴

お年賀は年初に書くべきものと決め一〇一九年より慣いとなしめ
徐夜の鐘の余韻を曳きつしたためるお年賀は手書きいのしの年の
外に出て深呼吸したれば新年の息吹き全身にすがしく沁みる
口腔を病みたる男は苦笑するおせち料理は目の毒 気の毒と私
老い初めし友の来たりて未来とうはのぞむべくもなしと嘆息まじり
老若に閑わりはなし未来指向 生きとし生くるる者の特権
未來論を熱っぽく語りいて目をやれば聴く人の耳みきからひだり
未來論を熱っぽく語りいて目をやれば聴く人の耳みきからひだり

一面に白詰草の咲きたりしこの野に保育所成りて暖やか
うら盆会過ぎれば風の変わるという先人の言葉思いつつ佇つ
天をつき木立震わす蟬のこえ果無くなりて時逝かんとす
長く使い不具合生じ電波時計好きにすればと見上げておりぬ
日盛りはカラスも飛ばず声もせず何處の森に羽根休めいん
墨絵めくおどろおどろしき雲出でて空にも不穏の空氣流るる
明けの風入れんと寝間のガラス戸を一尺ほどあけ今日のはじまり

唇くらく垂り硝子に雪のかげほのおのかげの降ることくみゆ
つるくびの花瓶に挿したるくれないの椿の花の落つる立春
日のかけりふたたび机上にひかりさしシヤガールの馬も花も空飛ぶ
みち潮のきわまりひととき流れなき川面にうかび鶴が首をさす
川の面に降る雨見つかなしめば感傷をわらわぬ水中の魚
祖母言いき「供花はこみにはできません」畑の雪と風にさらして
紅梅の切手が五枚雪の日のインクのにじむ速達郵便

ベンギンは名前を呼ばれ餌をもらう本当の名は何なのだろう
拍手送るほかない感嘆アシカショーときには生身のわたしが
息苦しくなじめぬ子だった動物園檻の中には生身のわたしが
咳をして響く近さの寒の朝ひかりは小さなほこらをつくる
おさまらぬ咳に効かない処方薬喉に振りまく龍角散を
菜の丈をしのぐ冬草あおあおと春のきさしを集めてひかる
青虫の消える霜の日キヤベツの葉ふくら巻いてふくら太る

牧 雄彦 「また来るよ」

・大

三 浦 好 博

一人位は

・銚

手も脚も動かず物も言へぬ姉晩年といふはかくの」ときか
車椅子押して病院の庭をゆくもみちにかすか「きれい」と言へり
病院の庭の楓のくれなる葉の重なりが日に透けて見ゆ
巻き寿司もケーキ作りも得手なりきその姉の味もはや望めぬ
「また来るよ」と言へばかすかに手をあげて姉は唇動かしにけり
ほつほつと灯ともる京の街見つつ病院を背に坂くだりゆく
もの言へぬ姉と別れて暮れ早き町のバス停に立ちて寒し

松 浦 稔 子

ミラノ

・羊

白百合の花束のようによと愛されし大聖堂の尖塔仰ぐ
尖塔のその上に立つ聖人の手は指し示す天までの道
マドンニーナと親しみをこめよびかけるミラノの空を占むる聖母に
神々のものがたりを射抜きこぼれるステンドグラスの光われにも
黙示録にヨハネの語るものがたり太陽光射るステンドグラスに
主祭壇の天井より見おろす磔刑像日くらむばかり足元ふるう
須賀敦子『ミラノ霧の風景』を残しすぎゆき二十年経つ

松 永 智 子

十三夜

・嵐

しんとしてあかときの空はれわたり半月のありただ澄みとほる
音のなく障子にさすかけあをくして呼ばれたること不意なり曰ざめ
はれわたるあかときの空にかかるは十三夜の月らし澄める
身の芯を硬くし仰ぐひえひえと蒼きまで澄む寒の朝月
垂直に截られたこと冷えとほる半月に会ふ寒終るらし
浮遊することばのゆくへ追ふもよし音なき衢に照る寒の月
中空に澄みまさりゆく月のかげ寒の終りのちかきあかとき

灯を消せば暖床に高まる荒海の手負ひめきたる一歌の声
「平成」の漢字習はぬ一年生一戻君らに年号変はる
高福寺の冬の公孫樹の骨格を背負ひて巡る我的歩みは
「平和は眠りを許さない」と言はるれど私は田舎に病みるたりけり
持続する怒り続かずたはやすく眠りてしまふ一人位は
気短は体に悪し楯突くは國にしありて滅びるもよし
歟座が南をのたうつ小夜中に小水注ぐ身を震はせて

宮 本 靖 彦

満 月

・凌

妻のメモ見つつ購ひしがアンパンを余力に買ひぬ欠食児童は
気に入りの食べ一斤買ひにゆく寒風のやむ日差しの隙に
黄土色の満月のほる早春の宵宇宙と呼べぬ距離たもぢるて
大寒の満月低く顔を見す親しみ一番宇宙時代も
楽しみ割る旅費掛ける時間が小さしと娘の提案の旅漫とする
子ども孫寄せむと購ひし隣地に鬼あざみ咲き老夫婦逝きぬ
細やかに記憶す不能となりたれば学びの大題しかとおぼえよ

三 好 聖

ミ

ネモフィラ

・伊

無関心の花を咲かせていたるなり畑に集う猫たちといて
大木の群れたつなかのどこからか台湾栗鼠の声がきこえる
冬の陽を背中に溜めて吾が妻はネモフィラ移植に精をだしおり
やわらかな思考の力もながら若く逝きたり竹澤治樹
ゆづくりと船団風の雲はゆく猫らが眠る陽だまりの上
「偉大」という旗をおろせばもうすこし違う世界が見えるだろうに
横浜のくらき運河を冲へゆく通船の上の母と僕らは

御代田澄江

辺野古よ

・茨

八乙女由朗

残像

・柴

辺野古埋めるなの署名。一月に二十万筆日本動かねば米に陳情希望より届け

ゴーン元会長が何者にあれ平成三年に購ひたるニッサン車に乗る外はなく

スカートをスラックスに替へ自動車学校へ出でぬ認知の検査を受けに

歌手声優美川憲一の朗読はいと心地良しラジオ深夜便

初夢に初泳させりき温水プールとんと壁蹴りスイーツと泳ぐ

いつの間にプールは沼になり藻も生ふる吾の前世は日高なりしか

不老不死の薬を盗み月に逃げし伝説の「嫦娥」の名を持つ中国の月探査機

茂木斌

ゴーンさん

・埼

鮮魚なら交換すればすぐ出るに鮮菜はまづ纖細と出る

老人斑顔のみならず脳内にも生れて海馬をいためるとなん

車ではあつといふ間の小さき橋 橋の名ぢらり牛くびり橋

落葉さへ甘く見るなと喝くる小石を隠し足を滑らす

訃報にて見し名前にて「丘」の字に「たかし」のルビをなるほどと読む

旅のひと若山牧水に上がるた牧之の父は牧水となん

保険却下当然ですよゴーンさん『貧乏のススメ』読んでないでしょ

もとむらしげど

春疾風

・そ

春疾風めぐりを吹きて花の鉢落つる音する独り居の午後

きまじめな講話を聞きて口元を綻ばすことありてよかりき

山姥も村のむすめも似合いたる市原悦子の艶のある声

盲腸にて入院せしと聞きたるに心不全にて逝きたる悦子

希林逝き悦子も逝きぬそれなりに美しければ余韻をのこす

十歳の娘を殺し父の顔やつぱり人は顔ではわからぬ

愛されて生きる筈ならん結愛ちゃんも心愛ちゃんも父に殺され

山下雅子

正月

・留

風をあげ羽子つき双六かるたとり昭和の正月みかん山盛り

袴の父おめかしの母対き合いで十歳のわが読む百人一首競いき

年々の賀状一枚それのみに安らぎ合えり戦時の仲間

能筆の賀状五十年続きしが江戸っ子ふきちゃんどうしたか

杖かざす魔女はわれより婿へ子へああ四歳の児の手にわたりたり

眼内のレンズや腿の人工骨に支えられ迎えたし新たなる世を

穩しかる元日の空澄みわたり大気汚染は思いもよらず
むかし昔わが身体なる自転車が夢を占めて時に現わる
駅周辺に自転車置きしことなども身に残りいて夢に幾たび
風に向きて自転車を踏む苦しさも汽車通いせしわが身を打てり
夢に頬つわが生きざまは暗くして誦経し行けり長き土手道
たましいは寺の台所に来ると言うむかし聞きたる諸哲の言葉
正直な人は二十代のわが妻を寺のおばさんと言いて嗤いき
杉花粉の下に育ちし身にあれば現代流は伴い難し

横田敏子

春を待つ

・福

雪道をりハビリ兼ねてポストまで約束の文ようやく送る

虎落笛聞けば思われるふるさとの雪匂いせし厳しき冬を

吹雪く夜をいつしか眠りに落ちてゆく 長き夜明けて来る春はある

立春の頬打つ風の冷たさよ飾りし雛の顔青ざめて

冬来れば春遠からじと背を伸ばし八十八の義姉の穏やか

雪雲の上は青空広がりて宇宙に統いているのだきっと

ロウバイの甘く香れる玄関にチャイム鳴りたり待ちいる友か

吉永惟昭 影

・熊

市原志郎 春近し

・春

・萬

雨後の月濡れに来たのか影法師水捌けあはね駐車場まで
燃ゆる歌曳く影慕う霜枯れの久住高原鉄幹の郷
影うてる露天出湯の淫樂像恐れ多くも跨ぎて浸る
8Kは征くこと難きアルバスをあはき尽しぬ怖き影をも
影のみの全容さらす河口湖赤富士の裏それが不二だよ
影おとす被爆の後遺に怯えつつ妻と経にきし昭和・平成
もののけの影ふり払うべし「ヨイシヨ」車椅子妻の朝の始まり

朝井恭子 山茶花

・森

市原やよひ きさらぎ

・萬

散り急ぐ山茶花の垣に足止めて白き花弁のいく枚拾う
山茶花の垣根の下なる花更紗踏むを痛みて離れ歩みぬ
古里の妹よりの雪便り「猫と炬燵で丸まつてます」
新しきカレンダーへの丸印いの一番は我が誕生日
如月は母とわれとの生れし月ほころび初めし梅の枝活けて
一人来し祥月命日の夫の墓昨夜の氷雨を刻字に宿す
又一つ感重ねしと夫の墓に語りつづいて空しさつのる

磯田ひさ子 桃割れ

・森

大浪美雪 山茶花

・森

浅草の見番うらの美容院日本髪結ふ人の出で入る
日本髪を結ぶ美容師は「花魁」を描きし高橋由一の血すぢ
「花魁」のモデルは由一の叔母といふ西洋風の顔立ち勁し
高橋由一の怒りの形が「花魁」はべつ甲の笄を二十本挿す
日本髪の腕たしかなる美容師の口数すくなく鄙のおもむき
「花魁」の額の尖りに連なれる美容師をさなの桃割れを結ぶ
鵠色の地紋に花の丸の晴れ着すこし勝気な七歳が着る

角膜を移植せし目にぼんやりとあかりが見えることの淋しさ
雪積もると報せる文ありたるをああその景は見えぬくやしさ
白き小さき犬が今宵騒ぎおり雪のちらつく予報なれども
ガラス戸とカーテンの向こう洗濯物春一番の風に揺れおり
風の音妻の寝息の聞こえる夜ああ我は幸せの真ん中
いのししの我が年となりしに何回目かと改めて思う指折りながら
春のきさしかさ庭にみどりのもの少し見えはじめたる朝となりたり

使われぬ庭の砂場はてんとう虫型ままごと道具のぞきていたり
大学の入試に向かう孫の背に蠟梅の黄光りて開く
朝に飲む薬ひい・ふう・み・八つ数えて今日が始まる
夫抱え診察室に入り行けば「仲良ですか」医師の声あり
雪予報崩れ雨となるきさらぎ朔日季節が動く
おちこちの冬芽にわかにぶつくりとふくらみて見ゆ雨の朝に
遊具眠る一月の児童公園に春は音なく近づいている

秩父路は機織の町道の端にヤブマオ、クサギと染草の生ゆ
山腹を埋め尽くせる杉の木のひとつひとつが秀先尖らす
神殿の裏山占めて山茶花のほのほの咲けり紅あわく
あまたなる狐の並ぶ稻荷社に隣りして小さき疱瘡社あり
刀剣や弓矢の絵馬より正面に我野社は掲ぐる歌仙の額を
山裾をもとおる西武秩父線ときおり軽き音を響かす
覗けるは立待の月クレーターより伸びたる線はうさぎの足跡

奥田清和

伊奈の笹原

・大

菊地栄子

米沢

・湾

島国といへど四季あり情ありてえびす祭の笹もて來い
わが成せる「春風馬堤の曲」の郷校歌の歌詞は唱はれゆくも

いくさ終へ毛布二枚もて帰還せしわれを待ちむしたらちねの母
産土は延喜式内伊居^{太宮}千歳といへどまばたきのとき

津の國の伊奈の笹原風もなし天つ乙女の領巾もまぼろし

國柄の違ひつぶさにうべなへど平和の信条ゆづるすべなし

家族主義すたれゆく世は窮々と自我を守りて進歩といふや

奥田陽子

昔ばなし

・羊

怖けづくこころ映すかうす氷融けつつ土に染みとなりゆく

黄鶴鶴の黄のいろしるく渡りゆくうす氷張る川の面を

野放団の原っぱなどは許されず買われて基礎の打ち込まれてゆく

鳥を追い草地払い敷きつめしコンクリ淡き冬の日を受く

追われゆけど抗議のすべての無き鳥と思ひいてふと可笑しなりぬ

昔ばなしに恩返しなす鳥のこと川べりさむく風吹くばかり

夕焼けの空にいすこか追わるるといつせいに鳴く鳥の声する

小野雅子

新春

・羊

赤と白の靴ならびたり遊行寺の坂へとむかふ短きときを

黒人の留学生のはそき脚湘南の道を走りてゆける

湘南へ向かふ電車の冬なれば品川あたりより空きはじむ

新しく開けたる街タワー・マンションが並びまだ建ちゆくといふ

スタッフ名横に流れて楽しみて見る番組の終り近づく

初詣での帰りの道でみかん買ふ知らない町の小さな八百屋

ホテルの売店に買ふコッペパン給食のとはどこかが違う

菊岡栄子

お節料理

・連

孫は未だサンタクロースを信じいるメルヘンのなか六年生なり
正月に帰宅せんとぞ施設にて夫の迎えをひたすらに待つ

動けない私の代わり正月の準備あれこれ息子が担う

息子の作るお節料理の香り立つ久しづりなる我が家へ帰る

うかららの揃いて祝う膳に着く息子の作りたる白味噌雑煮

元日を挟みて四日施設より戻れば飼い猫「マロ」つき纏う

掩ぐともなき鈴生りの柿おちこちにやがて纏わん寂寥の雪
小説家を講師に招き学びたる上杉鷹山の像若からず

憧れのまなこはじかれ立ち眩む洛中洛外國屏風

一対の同じ高さに和みたり直江兼続夫妻のみ墓

冷えまさる出で湯に再び湯浴みする寒に変わる今日の初雪
名も知らぬ異国の花も生けまつる藩主の廟に降りかかる雪
余りにも父母遠し妹の旅に添いつついに語らず

木村文子

背

・羊

草刈十郎

師走の町

・世

河野繁子

子供の頃

・雁

行く秋の日暮れに点す一灯の白く輝き冬に入りゆく
われは米寿教へ子は古稀はせもみぢ日々に色濃くなりてゆくなり
露の世にやりたきことをやり遂げて大往生をしたきと思ふ
菊づくり続けて老いし男あり花を愛せし人柄の見ゆ
師走の町めぐりめぐりて日記買ふ最初の店にまた戻り来て
冬の夜や熱爛酌みつと思ふこと強氣弱気の入り交じるなり
朝食のトーストかじり報酬の五十億とふ記事を見てをり

國井節子

一年の計

・春

玄関の上がり框に行儀よくスリッパ並んで迎へくれたり
長年の習慣なりし新年会 今年の計画立てんざわめき
目も足も不如意となれど口だけはいよいよ達者な会のメンバー
幾年も長くつづけしあは思ひで話に花咲く冬
この店の創作料理のもてなしに心うれしく満ち足りにけり
馴染みたる会員の中三人の姿の見えず心淋しかり
今朝見たる運勢欄に「年寄りは無理なき様に計画立てよ」と

小泉泰清 偶感

・う

家間に閉ぢこめられし冬のそら青く澄みて脳に染みる
くもり日の朝は冷たく着替へにも億劫となり床に長伏す
乾燥のつづくわが里日を閉ざす雲が敷き横む雨を乞ふなり
歌を詠み漢詩吟するを両輪に古い機関車白き息吐く
幼きに父母を亡くすも妻や子や孫に恵まれ愛に包まる

わがまちのメイン通りを歩くのはわれのみにして過疎とは空し
人住まぬ庭面の処々に水仙の円い黄の蕊眼に見えて

水のようなお粥なりしに戦中の教師は途中のトイレ許さず
都會での飢餓とトイレの恐怖など老いてなおさら頭はなれず
授業なく薪を背負いて山くだる手伝いなども懸命なりし
道すこし逸れたる場所より手招きしおのこが教うる狸の溜め糞
雨の日は糞のぞうりを作りため通学のみ裸足ではなく
電灯の覆いはずして終戦の夜を迎えたるあの安堵感
他の人はひょいと飛び越す屏の前とどまる長しわが一生は

小西美智子

節分のころ

・大

寒風に赤き頬の子駆ける道おたふくなんてんまっかに燃ゆる
まる顔の黄色い鬼の面をつけ母にひかれて帰る女兒あり
節分の豆まく声の聞こえ来しとおき昭和のふるさとの家
ふるさとの屋根に雪つむ里の家いまは残され義姉ひとり住む
今日は鶏明日は豚など少し変え身をぬくめんと鍋ものつづく
ひからびた皮につつまれにんにくは鱗茎かたき充実を見す
譲られし叔父のコートの似合い来て夫は出で行くO.B.会に

小林能子

芽吹き

・羊

銀色のラッカー仕立て醉狂なヤナギも夜半を覚めてゐるらし
口ばしのかたちに花芽ふくらみぬトレンドイーとふ銀色の枝
ほの紅きヤナギの花穂いとほしむ春まだ遠く部屋に隠りて
鱗片を落とせば開く花房の尾はさむさむと灯りに曝し
毛虫にも似たる薄黄の花房の幽かのゆれに冬の日は落つ
花散りて残れる緑のひと鉢に勧まさるる日々わがアダージオ

近藤栄昭

筑波山

・福

坂出裕子

ウイーンフィル

・洛

境内に油を持つて空を切り口上響く筑波山神社に
樹木帶筑波山を登りゆく肺へ奥へと神氣溶けゆく
泥道に靴跡重ねて踏みしめる人の想いの山に重なる
善き人の木靈にきわう御幸ヶ原外つ国人もおる耳を澄ませば
プロペラを止めて滑空する機近づきぬ気にせぬ感覺刃鋸びいる
持ちゆきしふかし芋出す間合いなしザックに庵蒸急ぎの登山は
たそがれる御幸ヶ原に背を向けて北風に追われ御山を下る

近藤芳仙

秋模様

・信

近寄ればほのかに柏のにはひたち白瓜漬かりゆく日日をときめく
畑隅へ鉢よりうつす金木犀根付きて数多の花かをらせよ
アボカドが軟骨つくると聞く日には用がなくともスーパーへゆく
蝶の舞みて黄色の葉をちらす寺の公孫樹は幹太くたつ
ゆく路へ裸木の影のびてをり冬のタイヤをはきにゆかうか
残り柿朱に透けつつ大空へトランペットをひびかす夕べ
星模様のガーゼにたのむ限りなりマスク幾枚けふぬひをはる

坂上直美

ラフォルグ抄

・天

今宵またまるく輝く月ありて思い出さるジュール・ラフォルグ
世紀末巴里の都は騒がしく鳴呼永遠は何處にあるのだ
青年の心はあまりに纖細で夭折よりほか道はなかった
憂鬱なエルシノーラの空の下青年は遠く海を眺める
生きるべき?いやそんなことどうでもいい我ら人間何れ死ぬのだ
ラフォルグの故郷は月降りそぞ光は彼の母のまなざし
死後のこと死後に知るべし今はただ月の光を窓辺に浴びん

佐藤道子

病む

・甲

延命治療の有無を問はれてとまどひな緊急入院したるその日に
歌あれば歌さへあればと言ふ人を羨みてをり歌さへ空し
傾眠とふ魔物が夫を捕へて日がな一日夢うつなる
大切な人の笑顔と話したく家事そこそこにベッドに添ひぬ
眠りつづリハビリ体操する夫の時に笑顔の見えて嬉しも
「杖ないか杖あれば歩ける」諧妄の夫が必死で寝言に探す
今日は何日?毎日間違ふ夫なれど見舞の礼状さらさらと書く

ニューカイヤーコンサートなり楽しげな指揮者の笑みに世界が笑ふ
拍手する笑顔の人の映像に涙出でくるうれしくなりて
宝石と輝く美しきシャンデリア見たかつたのはこれの映像
生きてゐてこんなしあはせあつたのだ樂の響きにこころ躍れる
とほき日に訪ひしあの街とつくにのあの建物がいま映像に
来年もこれを見るため生きなむと力いただくウイーンフィルに
耳とほくなりたる我的耳底にいまも聞こゆる青きドナウの

佐久間晟

日乗(二〇〇)

・湾

椎名恒治

浜

・橋

関根和美

ひかり

・埼

「都逃れた義経さへも…」頼真和尚作詞の九十九里音頭
この浜の行部岬まで一里毎片葉の草九十九本押せりといふ
九十九里音頭久しく聞かず砂鉄発掘に荒れに荒れたる砂丘
彩れる吹流し目掛けて海の上に砲煙止ますあがりき
秋の虫チソロリン聞きにゆきたりき少年われは
飯岡の波止場の巖に立つ鳥居巖の上に涛をかぶりて
行部岬に初めて上り見霧かす九十九里浜の茫茫

鈴木結志 天平の宝物四

・福

紀貫之朝臣の書流れよく古筆手鑑として今に息づく
時の世にめずらしカタカナ交じり書のけやけきまでに味わい深し
宸翰様書風うるわし後嵯峨天皇の消息の書を手写し習う
鳥獸や菩薩に釈迦の見守らるる仏涅槃図に死の儀教わる
筆つか妙なる後宇多天皇の消息の書は日路をみちびく
全ひのき一材造り五智如来坐像透彫り秘めてかがやく
千手觀音千の掌の目が透視してこの世くまなく見つめてあかじ

閻根榮子 立春近し

・埼

ポケットの小銭をさぐり缶コーヒー買うべく立てりちらちらと雪
括られて畠に残されし白菜の霜光りつつ立春近し
わずかにも残る風習に晦日の祓いの幣を辻に挿しあぐ
一年の悪を祓いて送りたる幣しろじると風に吹かる
飛び立ち雀子は二羽枯れ立てる葉のひとむら冬日のぬくし
この夜頃月に最も近づくとう木星の自転周期は十時間
野の匂の乏しくなれば庭先の万両の実へ鳥ら寄り来る

長崎を思えばまぶしはあるかなる光源なるも身を照らしつぐ
立春を迎える日ごろ彼の地にて召されしひとの軸かかけたり
やや早き訪れのよき菜の花と桃を投げ入れ華やげる床
彼の一生証しなすべくまとめみんこの年われに課さるるたいせつ
三人子とわれ一枚の写真にて納まる旅券に海越えし日よ
幼年の汝れが写し絵くったくなきほほえみをこの胸に抱く
椿咲く五島の海にひかり降る夢より覚めてうきたつクルス

高尾恭子 冬の動物園

・大

忘れ物を取りに帰ったランドセルの記憶たしかにベンギン立てり
キリンにも鬱屈あらん真っ黒な舌ながながとくねらせている
「At the Zoo」ボールサイモンが語りだすLPレコードりきれるまで
サバンナのうんこって誰かが詠んだけどパンダの縁のうんこせつなし
一頭になった旦旦ながいながい物語りせよ六甲おろし
サル山に端座する汝おどといの夜の徘徊ひきずつて
子ども並みになつたってことか袋菓子さげて駄菓子をフリーバスする

高津砂千子 姉の恋

・風

漢方の大家は椿の大家にて渡辺武氏に姉は学びき
漢方を学びし姉の処方にてわが癌完治す二十年前
薬局と家事に励みし五十年余休むひまなく姉は倒れき
深夜まで働く姉をいさめれば「これが生き方」貫き通す
若き日に結ばれなかつた姉の恋思い出すことあつただろうか
兄の言う「十年早い」にうなずけり七十六歳姉みまかりて
人は知らず不幸せとうしあわせに辿り着きたるわれら姉妹を

高橋和代

それぞれの

桃

田土成彦

葛湯

宙

里の家に隣り合ひたる家を建てなべて良き事始まりし

夫の同意すすみてゐるを大切と思ひ一切迷惑かけぬと決めし

誕生の地に夫の勤務地ありしこと一家それぞれのストーリーとなりし

山茶花の散華のさまによみがへる静かに母の逝きし亡父の許

病む母の気弱くなりしをなだめむと身をさすりをりか細くなりゆく

隣り合ひ暮らせるゆゑに父、母に淋しさ与へず葬りたりし

母の里の曾孫へ孫の嫁ぎたり「縁」とふ大切さ沁みる

滝田靖子

コンビニ

新

田土才恵

むらさき

宙

コンビニのレジの店員がにこやかに温めますかと言ふ 何をおさなりなそんな言葉も慕はしいかくも心の凍へる朝は

われの身の温みに憂る窓ガラス命とは温きものにありたり

木の末に残るもみぢを若き日は未練がましいなどと言ひしが

散り急ぐもみぢ残りゐるもみぢ命はつねに平等にあらず

真夜中の遠き鉄路を行く貨車の音聞こえくる仮眠の部屋に

寝ては覺め覚めては微睡む二時間の仮眠休憩終へて働く

竹下妙子

道祖神

霧

玉井綾子

学校の音楽会

羊

道の辺の草なかに御座す道祖神彫りし人らの心を託し

廻道のかたへに御座す道祖神おひとりなれど微笑み給ふ

なにゆゑに散り急ぐのか花胡椒の青葉よ冬はいまだ浅きにはらはらと青葉の落ち花胡椒冬陽に冴ゆる真紅の実はも

あやまちて切りし親指の鮮血を當めて己の生をみつむる

ものの色とぼしきみ冬の夕焼は吾にかへりてくるものあれ

夕茜たちまち川をそめ上げてひと日の果ての胸底を染む

オールトの雲抜けて出でし氷塊のあらむ寒の水のみどを下る
積む雪の重さに屋根の軋む夜は太郎も眠らず次郎もねむらず
人生が終つたなどと思はねど残り一切れだけの羊羹
パンに垂らすみかん蜂蜜あはき黄のとろんと南の風のただよふ
すんだ餡白玉団子に盛り上ぐるそのうみどり今日は啓蟬
はつたい粉湯と蜂蜜で練り上げてうふふともらすおやつタイムに
熱湯に溶けゆく葛の粘性が伝はるスプーンを持つ指先に

東北に育ちし花梨の大き実を煮れば茜の色の冴えゆく
「もってのほか」小春日和に輝きし菊の紫ふとも思わる
紫に繋がれる味びん詰のハックルベリー色鮮やけし

銀杏の実のはぜるおと心地良し電子レンジに七粒がほど
カリカリと甘き漬け梅ひと手間の旨味広がる冬日だまりに
東北の寒さは知らず君が手に育つ野菜の甘さ増すころ
じゃあまたね温かき声を響かせて雪国からの電話切れたり

学年ごと入替制の音楽会 保護者を見分けるストラップの色
学校の音楽会に来て知れり子に流れいるメロディ・ハーモニー
五月には子が歌いし曲 半年の仕込み済みステージに聴く
マジックでドレミの文字が記されし鍵盤ハーモニカの不協和音
自分の手と隣の子ばかり見て弾けばタクトもピアノも置いてけばりに
弾き終えて伸ばす手指が眺ね上がる 自然のオーレ／ラ・クンバルシータ
平成の合唱曲が小学校時代の友へ手紙を書かす

虎谷信子 今は幻

・伴

永塚節子 きざはし

・銀

・銀

床の間に若松飾るも怠りぬ。薄端花器 かたづけしまま
角火鉢しつらへ 鉄瓶しゆんしゆんと。年始の誰彼 今はまぼろし
つどひ来て 百人一首カルタ会。朗らうの声 今はまぼろし
お鏡をひらく手力 われになく、早立春となりて いただく
マスかかへ 家内に豆まく男の子なれ。「鬼は外」なる大音声よし
裏庭の日当たりに黒猫うづくまり 仔づれと知りて 仰ふやしやる
家猫の居らぬ生活に やや馴れしに、可愛い仕草 テレビに映る

中島央子 初鏡

・森

夜ふかく天祖神社へ初詣り振舞酒のあつきを啜る

一日づつ過ぎゆく現ありありと歳古るわれの初鏡拭ぐ

戦前のわれらが正月羽子板に藤娘るき空には奴風

弟とむつみし時のみいかさよ羽根つき風あげ戦争ごっこ

ひきあてしおみくじ吉と告げてをり歩ける足のあるは上等

足元の危ふきまでの北の風かんかん急かせる踏切わたら

冬の燭消して一瞬真夜中を救急サイレン通りすぎたり

中島義雄 結婚記念日

・岡

海辺よりだんかすら駆ける賴朝の蹄の音を今年また聴く
小正月の早も過ぎたる初詣でに柏手ふたつ心して打つ
初詣での後のコースは御決まりのそば屋パン屋に続く豊島屋
職人の手仕事見る植物に引かれつもきざはし求む
どこにもパン屋はあれどあの味の黒パン焼くはこここの店のみ
ライ麦粉百パーセントの黒パンを求めて来たるに今日は閉店
鎌倉の右も左も知りつくす友に従う小春日のもと

久我田鶴子 生きてらんない

・羊

今朝割つた卵のなかに黄身三つ吉か凶かは問はずにおかう

角館桜並木の蜂蜜をひかりに透かしそれからそれから

寒凌ぐ日々を電話に母の言ふ “生きてらんない” まだ余裕ある

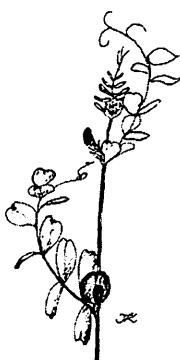
ひとりゐる気楽さ好む母なるを恃みてはんつき声さへかけず

ゆふぐれに傾いてゆく言の葉よでたらめ尽くし華やいでるよ

息を吐く息を吸ふため息を吐くくれなる絞る椿をご覧

心臓のうきが重い ドラミングちひさくしてみるマウンテンゴリラ

三回忌の案内書くと机に対ふ逍りし者の拘束として
わが妻と汝のなりたる遠き日を節分の豆薫れば懷ふ
髪上げてわが辺に立ちしエプロンに雪の明かりが映りをりたり
「憂きことを海月に語る海風かな」児へ俯きし妻の首筋
火を産みて苦しみし神代の神に似て盆に耐へたる年月憐れ
見せざりし泪ありけむ年月を交響曲の如く唄ひぬ
ショートケーキひとつ供へる結婚記念日黄泉平坂雪に霞みぬ



香川進の生きものの歌 6 田土 成彦

・子をまもる激しき鶴の声きくわれらかかる叫びをかつてあげずき

『木曽川』より

『木曽川』のなかで鶴が登場する場面は二か所ある。一つは長良川の鶴飼であり、もう一か所は『鶴も山』の鶴の飼育現場と思われる所で、これは後者の歌である。(こ承知のよう)に香川

先生夫妻にはお子様はいらっしゃらない。だから状況のような激しい叫び声をあげることはなかつたという述懐であり、その背後からはどうしようもない寂寥感が浮かび上がる。たぶん子をなさないという選択は意識的なものだったと思う。理由はこれも筆者の推測だが原爆による放射能被曝の影響を感つてのことではないかと思う。

さて、歌に戻つてこのめつたにお目にかかる結句に注目したい。「あぐ」に打消しの助動詞「ず」が付いたものに、さらに過去の助動詞「き」が接続している。多少違和感があり、それを故意に楽しんでいる感じがする。文法的には過去の助動詞「き」は活用語の連用形につく。打消しの助動詞「ず」は「す・す・ぬ・ね・〇」と特殊な活用をすることで文法的な誤りはないというのが香川先生の主張だ。だからどの歌集にも一回はこれを登場させると、直接香川先生が仰つていたことだから記憶にとどめている。普通には打消しの助動詞を「ざり」に替える話なのだが、あえてそうしないのが先生なのだと思った。

現代歌人協会主催 朝日新聞社後援

第48回 全国短歌大会

開催日時	一〇一九年十月二十七日(日)
会場	学士会館 東京都千代田区神田錦町三-二十八
選者	磯田ひさ子 内山晶太・大島史洋
賞	沢口英美 島田修三 高木佳子・林田恒浩 日高義子・松平盟子・吉川宏志
入賞作品	全国短歌大会賞・朝日新聞社賞

学生短歌賞・選者賞

入選発表・入選歌批評・授賞式

特別選評 日高義子×吉川宏志

※入賞作品は朝日新聞・短歌雑誌にも掲載されます!

◆ 作品応募要領 ◆

◆ 作品応募要領 ◆
新作五首以内 (何組でも可 未発表作品に限る)
参加料 一组 三千円 (学生は一千円)

※学生は小学校から大学(専門学校を含む)まで。
B4判の用紙(四百字詰原稿用紙も)に作品を書き、
右の欄外に郵便番号・住所・氏名・年齢(学生は学
校名)・電話番号を明記。

応募料は、現金書留または郵便為替を同封。もしく
は郵便振替により送金。(振替口座 00190-2-10916
必ず受領証の写しを同封してください。)郵便切手
は不可とします。

〒170-0003 豊島区駒込一三五一一五〇一

現代歌人協会 全国短歌大会事務局あて
締切 一〇一九年六月二十日 当日消印有効

墨絵の絵巻

佐々木美枝子

私の短歌の原点

初詣等に短歌に生き方に取り組むことを神に誓いて

初弾きは新年会の出し物の子の日の遊び六段の調

歌会の新年会で子の日の遊び初春の一と心を籠めて

歌友より“致知”的雑誌を贈られし問い合わせらるわが生き方を

放送大卒業をせしこのわが後輩のためににも同窓会を

祝辞述ぶ三月と九月の卒業式世界の出来事織り込みながら

年に二回卒業式の祝辞なりわが論文の発表の如

亡き夫が入院する度オレンジの光をたよりにわが家探ししと

夫亡き後光と薰の二匹の猫わが側離れず支えられ来し

夫亡き後十余年経し今でさえ決め難き時仏壇に対う

黄昏れて三羽の白鳥大空へ見渡す限りの墨絵の世界

親子なるか三羽の白鳥鳴き渡る薄墨の世界絵巻と化して

幻想の世界へわれが迷いしか黄昏の天地墨絵の絵巻

今月の二人に選んで頂き、努力もない未熟者の私がと大変驚いております。佐久間晟先生からは「是非お受けして」と。

私と短歌の出逢いは、明治生まれの両親の元に生まれ、幼い頃から母に「為せば為り为さねばならぬ何事も…」と育てられ、私の人生はこの上杉鷹山の短歌に支えられて生きて来たと言つても過言ではない。又、父からは歌聖と謳われた太田道灌の努力の元となつた「七重八重花は咲けども山吹の…」の短歌で努力が如何に大事であるかを教わった。私の短歌作りは全くの自己流で高校生の時から。その後、筝の小野先生からの勧めで俳句作りを少しの間。阿部みどり女先生主宰の「駒草」に五句投稿し三句取り上げられた事も。しかし、仕事、家事、お筝、放送大学と多忙で俳句も中止。

歳を重ねたらやはり短歌と、友人の長岡知子さんから佐久間晟先生を紹介して頂き、平成十六年一月から地中海誌に載せて頂く事に。年に六、七回の筝の演奏会の為に歌会にも出られず上達もままなりませんが、私の目さすは浅野内匠頭の辞世の「風させふ花よりもなほ我はまた春の名残りをいかにとやせん」の様な心に響く短歌です。

■ 月の二人 ■

枕詞

本田 良一

龍之介の『蜜柑』

天離る鄙に来たりてせせらぎの流れ聞こえて琴の音のごと
たまさかる吾寿命使い切り娘顯子に渡す本願

ひさかたの旅路遙かを敦煌の郎女飛天舞い立ち送る

玉杵の教典をば運び来た僧玄奘教え東西

うちひさす都の賀詞は大君の退位惜しみて日神々しき

ちはやぶる人生有りなん我が道は重きを背負い笑いきた道

白玉の君の舞い立ち鮮やかに新成人か和服きらきら

八隅知し行幸有りて君心君移れども民にそのまま

不知火の筑紫の遙か憶良立つ知らぬ百濟に雁は帰りぬ

うちひさす都を離れ黄塵の行客悲し水汗かんしょう哭

葦引きの山和の国を倭と記した倭人伝歴史ひもとけ意味もとけ

万世の倭歌やまとこう有り和歌も有りこれ答え歌和歌姫出づる

あおによし奈良の都の鐘の音が栄華盛衰今も伝えむ

「忽ち心を躍らすばかりの暖な日の色に染っていた幾類の蜜柑を窓から投げてわざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのだ」この一節は芥川龍之介の短編『蜜柑』です。私は『蜜柑』を始めから読み、このくだりに来ると『慟哭』するのです。我が人生「人前で哭くな、涙を見せるな」と己を律してきました。しかし、このくだりだけはダメです。胸迫り心が哭くのではなく、頭が哭くのです。つまり理性で哭くのです。芥川龍之介はこの風景を「私はこの時始めて退屈な人生をわすかに忘れることが出来た……」と結んでいます。つまり癒されたのです。芥川龍之介の短編には人が作り出す赤い閃光のような感情風景をとらえて読む者を離さないところがあります。ご存知の『トロッコ』「彼の門口へ駆け込んだ時良平は……」。又『舞踏会』、「我々の生の」ような花火の事にも有ります。私はこうした人が繰りなす情感を歌に詠みたいと統けて、短歌歴約四十年です。されど未だ詠めずです。せめて今回エッセイを綴ってよしとの「地中海」に、歴史から遠のく龍之介の一節を書いて役に立てばと思いました。

◆ 今月の二人・佐々木美枝子作品評 ◆

親子なるか、絵巻と化して

佐々木さんは宮城県名取市在住。筝の名手であると伺う。

・初弾きは新年会の出し物の「子の日の遊び六段の調

今年の筝の初弾きの歌。「子の日の遊び」「六段の調」が、実にゆかしい。野に出て小松を引き若菜を引いて遊び、千代を祝つて宴遊するという慣わしが今に息づき、そこに響く筝の代表曲。いかにも新年の華やきが感じられる。

・年に二回卒業式の祝辞なりわが論文の発表の如

前の歌を読むと、放送大学を卒業された後、三月と九月の卒業式で祝辞を述べられたようだ。卒論の発表のような思いで、少し緊張して晴れの場に立たれたことだろう。

・夫亡き後光と蕉の二匹の猫が側離れず支えられ来し

猫の名前が「光」と「蕉」。源氏物語の世界である。夫の亡くなつた後の歳月を、この二匹の美男猫（？）に支えられてきたという。「わが側離れず」に「よくぞまあ」といった感謝の思いが滲む。四句目までは「二匹の猫」が主語だが、「支えられ来し」の主語は「わたし」ということになる。「二匹の猫」を主語にするなら「支えくれ来し」だろうか。

・親子なるか三羽の白鳥鳴き渡る薄墨の世界絵巻と化して

黄昏、夜の闇が支配する前の薄墨色の世界。そこを親子とも思われる三羽の白鳥が鳴き交わしながら渡つてゆく。それを見ている作者は、水墨画の絵巻を見ているようにも感じられたのだろう。こうした光景に巡り会えた喜び、美しい幻想のような世界に身を置いている幸せ。白鳥に向けられた親しい眼差しが「親子なるか」に籠められているようだ。

◆ 今月の二人・本田良一作品評 ◆

白玉の君の舞い立ち

評者・久我田鶴子

本田さんは、熊本市在住。忙しい毎日を過ごされているようだが、遊び心をお持ちらしい。このところの作品は「枕詞」に遊んでいる。

・天離る鄙に來たりてせせらぎの流れ聞こえて琴の音のこと
「天離る」は「鄙」にかかる枕詞。都会から離れてやつてきて、せせらぎの音が琴の音のようだという。正統的な枕詞の使い方で一首は出来上がっている。

・たまさかる吾寿命使い切り娘顎子に渡す本願

「あまさかる」に対しても、こちらは「たまさかる」。「たま」は「魂」「靈」、「さかる」は「離る」。魂が離れる、の先には死が意識されている。我が寿命を使い切り、その時には娘の顎子に願いを託す、というのだろう。枕詞と見せながら、リアルな心情の吐露。ちょっとと涙みさえ感じる。

・ひさかたの旅路遙かを敦煌の娘女飛天舞い立ち送る

「ひさかたの」は「空・天・光」にかかる枕詞。ここには直接かかる言葉は見られないが、飛天の舞う遙かな天空のイメージ、自らが敦煌へ飛んで行った空路のイメージが広がる。

・白玉の君の舞い立ち鮮やかに新成人か和服きらきら

「白玉の」は、白玉あるいは真珠のように美しいというのだろう。枕詞のように響いて、振袖姿の新成人のきらきらした姿が浮かんてくる。詠われているのは、現代そのものである。枕詞を現代に生かし、また新たな枕詞を創造し、文化としての歌に遊ぶ姿は、短歌の長い歴史から切れたかに見える現代短歌への一つのアンチテーゼなのかもしれない。

還暦を過ぎた頃、何十年振りかで中学校の学年同窓会がありました。そこで国語の恩師奥田清和先生が短歌でご活躍だと噂を聞きました。その後主人の両親と私の母の三人を見送った私は、看護から解放された時間を使って自分の為に何かをしたいと思つていました。そんな折、原谷の垂れ桜見物の帰りに奥田先生はじめ、大阪支社の数人が私の店に立ち寄つて下さいました。その中のSさんに同窓会で卒業以来初めて出合いい、私は京都に嫁ぎ葬局を営んでいる事を話しました。彼女が偶然上手に店を見つけて下さいました。「短歌は紙と鉛筆があれば出来ますよ。」と恩師や旧友に誘つて頂き躊躇なく地中海に入会させて頂きました。

奥田先生は当時大阪支社長で、私が中学生の時、三年間私達の学年の組担任で皆が兄と親しむ若い先生でした。遠いけれど、京都からのこのこと私の生まれ育つた豊中、池田、大阪へと地中海の会合に出掛けました。奥田先生からは「続ける事。」を言い渡され、先生宅での勉強会に参加。何の知識も無い私の拙い詠草を添削して辛抱強く先生は教えて下さいました。勉強終了後は奥田御夫妻と会友との楽しいお喋り会となっていました。深く深く感謝しています。

ですが戦後に小さな文字の薄っぺらな同人誌が机の上に載っていたのを思い出しました。何かの折に伯母から「お父さんは貴女の事を詠っていられるのを集めましたよ。」と数枚の紙を頂きました。読みすすむ内に「父はこんな事を思っていたんだなア。」と心を打たれましたが、机の引出しに仕舞い

ですが戦後に小さな文字の薄っぺらな同人誌が机の上に載っていたのを思い出しました。

私と短歌との
出会い

始まる歌を十か二十首位作ろうとしましたがうまく詠めず同じ所をぐるぐる堂々めぐりしているだけでした。でもやってみる事で自らの心の狭さに気付き、歌を作ろうとする事で自分を冷静に見つめる事が出来たのでしょうか。何を歌いどう切り取るか、毎月苦悶しますが古い歌を見れば忘れ去って

れました。狭い世の中です。

「めつち」の同人である父方の伯母に地中海誌を見てもらい入会した事を話しました。「良かったね、お父さんが喜んでいられるよ。」と言わればぐり仰天しました。十五歳の秋に父を亡くした私にとって父は全く過去の人になっていました。伯母は父の勧めで昭和二十三年に「あめつち」に入会したとの事、父も同人だったのです。父が短歌を作っていた事は全く知らなかつたの

私の入会を知った伯母は奥田先生に挨拶状を送っててくれました。先生から「丁重な手紙の手紙が届いた。」と知らされました。先生は「大阪歌人クラブ」の名簿で常に先生の名前の直ぐ前にある名前なのでどのような人かと長年思っていた人だったと言わされました。狭い世の中です。

ある時は辛い事があり、気持が落ち込みました。橘曙覧を見習って「悲しみは」で始まる歌を十か二十首位作ろうとしましたがうまく詠めず同じ所をぐるぐる堂々めぐりしているだけでした。でもやってみる事で自らの心の狭さに気付き、歌を作ろうとする事で自分を冷静に見つめる事が出来たのでしょう。何を歌いどう切り取るか、毎月苦悶しますが古い歌を見れば忘れ去っていた作歌時の情景が鮮やかに蘇ります。

こうして短歌との出会いを振り返ってみると、父や伯母、恩師、旧友などさまざまな縁があつた事を感じます。最後になりましたが、続けられた事、地中海ならではの得難い全国大会の経験が出来た事、お世話をになりました皆々様に感謝しています。

作品 A (ハ行)

演田みや子

餅搗き

・岡

萩原嘉津子

昔あそび

・宙

浜脇景子

良縁願い

・夢

お手玉にビー玉双六独楽回し昔遊びに本気度あがる
幼子の喚声あがる体育館走り廻りて鬼ごっこする
男の子にキヤッチボールをしようよと誘われ張り切り運動場へ
ストライクいいやボールと言いかけて六年生と対等なりき
友と歩く国道沿いのガタガタ道危ないからと一列になる
友の持つ歩数計はと覗き込む一万歩表示に満足するなり
節分に撒く豆うっかり買い忘れ手持のビーナッツ派手に撒きたり

八田暁美

小豆粥

・羊

林清江

新年の街

・朱

新年の三社参りに吾子たちの良縁願い御札もとめる
境内の小さき池に水はり最近見ない懐かしき景色
山裾の神社の裏は陽光の届かぬらしく凍る池あり
わが地区の消防団の年末の夜警当番に子は出かけゆく
夜警より何事もなく帰宅せし息子は静かに階段あがる
暖冬に枯草の間に青々と草の生えいて早や目立ちたり
着服れることもなく過ぎ如月の庭の鉢植すこし並び替え

境内の澄めるやり水冬の陽を反し流れる音なくながる

ふつとあく歲晩ひと日はおまけなり「フォレスター」聴きつつ何なさず暮る
庭の花届けやらんと電話する友は暮れよりショートステイとぞ
大晦日に南天水仙切る音の空に広がりもうすぐ暮る
二人旅にもとめし九谷の壺に生け新年飾るも夫は施設に
凍つる宵次男の妻より届きたる小豆粥する湯気をもとする
今日ひと日の小さき贅沢新書本一冊もとむ『極上の孤独』

如何ならむ哀しみ哉せたる新聞ぞ今朝も三時にことりと届く
餅搗きたしと孫言ひくれば叶へむと朝より白や杵など洗ふ
先づ糙米・臼・杵・薪を整へて後へは引けぬ「さあ来い孫よ」
僕がわたしが競ひて杵を奪ひ合ひ幼の餅搗きたけなはとなる
威勢良き声にそぐはぬ杵の音白なる餅は冷めてしまひぬ
冷めし餅を粘土のごとく千切り分け幼の造形意欲華やぐ
歪なる餅の雑煮の旨かりと一人の嫁よりメールが届く

新年の出家並の上に輝きぬ悲喜こもごもを今年も進まん
オリエンピック世界万博と浮き立てど消費税値上げ暮らしへ間に
蒼き空拡がる街をそぞろ行けば松飾りせぬ家の増えたり
夫植えし温州みかんの初なりは皮ざらつけど果肉は甘し
初売りの福袋あさる中国人バイヤーが狙う日本製品
継母とは五歳違いなり四十余年共に暮らせど母とは呼ばずに
父の死後継母をみとりし友の面穢やかにして一人旅に出る